66th RECITAL 【1998 年（平成 10 年）1 月 31 日】 ザ・シンフォニーホール

4th STAGE（現役・ＯＢ合同ステージ）

男声合唱組曲「雪明りの路」

Ⅰ 春を待つ
Ⅱ 梅ちゃん
Ⅲ 月夜を歩く
Ⅳ 白い障子
Ⅴ 夜まはり
Ⅵ 雪夜

作　詩：伊藤　整
作　曲：多田　武彦
指　揮：北村　協一

男声合唱組曲「雪明りの路」

組曲「雪明りの路」の思い出

多田　武彦

北村先生がアンコールで、曲目を告げないまま棒を振り始め、メンバーが、「泣きやんだあとの様に……」と歌い出すと、客席から一斉に拍手が湧きおこる。日本のクラシックの演奏会では余り見かけない現象だが、この、「月夜を歩く」の曲に限って、拍手がおこる。

十六・七才の頃、私も月夜を歩くのが無性に好きだった。昭和20年に戦争が終って、その年の11月に、大阪の東住吉区に住み変えたが、翌年の春頃から、月の明るい夜、夕食後大和川の方へ向って、歩き出す。季節によって、霞がかかったり、蛙の合唱があったり、誘蛾灯が青白く光ったり、河内音頭が秋の夜風に流されて来たり、さまざまな光景が広がった。

昭和34年、関学グリーから二度の新曲を委嘱されたとき、「伊藤整先生が幼少の頃に過ごされた小樽のさまざまな姿」を描いてみようと、「雪明りの路」に取り組んだが、最初に「月夜を歩く」が目に止った。

「泣きやんだあとの様に／月が白い輪をもった夜更けて／私は……」のこの行は、実によくわかる。

「ひとり忍路の街を通りぬける／切通しをのぼりきれば／海の見えるさびれた家並がある」—これは、東住吉区とはちがう。すぐに、私の心の中の撮影機が回りはじめ、映像化がおこなわれた。「灰色の背」「塩風で白くなった板戸」「いたどりの多い忍路から出る坂路」が、感動を呼ぶ。そして、私がやったと同じように、伊藤先生も少年時代には、白い月を顔にあびて微笑えまれた。

この組曲を歌った人たちの何人かは、小樽へ旅行し、月夜にこの、「いたどりの多い坂道」を歩いている。地球上の、数え切れない人たちが、長い年月の間、月夜を歩いたとすれば、この行為は、どうも人間行動学の原点に近いところに位置するらしい。だから、ひとりでに、拍手が湧きおこるのだろう。

「月夜を歩く」に限らず、詩集「雪明りの路」に納められている詩群は、すべてが素朴で美しい。昭和35年夏、関学グリーの東京演奏会が共立講堂で催されたとき、関学グリーの招きに応じて伊藤先生が聴きにこられた。

当時29才の私は、ひどく緊張して、おそるおそる先生の横の席に座ったが、この組曲にじっと耳を傾けられ、合唱音楽のすばらしさを話された。カメラをとり出して、そっと、ステージのメンバーたちを写したり、自由詩でも、立派に歌曲になることの新発見を喜ばれたりする先生をみて、まさにこの心の中から、詩集「雪明りの路」が出来たのだと、私は感動的に納得した。

伊藤先生との出会いは、生涯、たったこの一度だけ。しかしその清廉な横顔は今でも私の脳裡に焼きつき、この組曲の一つ一つが流れるたびに、北国に生れ育った一人の大家の美しい魂を、しみじみと思い出す。

（第60回関西学院グリークラブリサイタルプログラムより転載）